（別紙様式）

令和３年度の取組の概要

学　校　名	気仙沼市立新城小学校	主な取組教科	国語科	
研 究 主 題	思いや考えを，分かりやすく伝え合い，共に学ぶ児童の育成 ―どの子にも分かる・できる国語科の授業づくりを通して―		研究年次	３／３年次

１　今年度の主な学力向上の取組と成果

学力向上の取組	成　果	評価の根拠
○学習のねらいを明確にするための焦点化 （単元構想の工夫，学習課題・発問の精選）	・単元を通して付けさせたい力や学習のねらいを明確にすることで,児童の意欲が高まった。	・89.0%の児童がめあてや発問を聞いて考えたり話し合ったりしてみたいと回答した。（R1･･･関連調査項目なし，R2･･･86.6%）
○分かりやすい授業につなげる視覚化・構造化 （板書の工夫，学習展開の工夫）	・心情を視覚化したり，単元計画や本時の流れを示したりすることで，分かりやすい授業につながった。	・91.5%の児童が授業が分かりやすいと回答した。（R1･･･90.2%，R2･･･関連調査項目なし）
○対話的な学びにつなげる共有化 （対話の目的やゴールの明確化，対話の方法の工夫）	・目的を示し，話合いを授業に積極的に位置付けたことで，自信をもって考えを表現できるようになった。	・88.4%の児童がペアやグループで自分の考えを伝えることができると回答した。（R1･･･関連項目で 37.7%が発表が苦手と回答，R2･･･90.1%）
○協働による授業づくりにつなげる工夫 （３ステップの事前検討会，外部講師を招いた研修会の実施）	・研究授業を単元づくりから協働で検討したり，専門家による研修会を実施したりすることで,授業づくりに対する協働性が高まった。	・指導案や提示物を分担して作成したり，アイデアを出し合ったりすることで授業者の負担が減ったという教師の声が聞かれた。

２　残された課題・要因と今後の方向性

課題・要因	今後の方向性
・教師の説明が多い傾向があり，より児童が主体となった学習展開を行っていく必要がある。	・内容の確認の時間を減らし，主発問について児童がグループ等で話し合う活動に重点を置いた授業展開を工夫する。
・焦点化，視覚化・構造化，共有化といったユニバーサルデザインの視点を取り入れた取組を他教科にも波及させていく。	・課題となっている算数科を中心に，他教科においてもこれまでの研究の成果を踏まえて,「どの子にも分かる・できる」授業づくりに努める。

◆気仙沼市立新城小学校　研究関連 URL：http://www.kesennuma.ed.jp/shinjou-syou/